

---

# とんでも勇者御一行様

アタカス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とんでも勇者御一行様

### 【Nコード】

N8989G

### 【作者名】

アタカス

### 【あらすじ】

突然勇者にされたカインの超絶いきあたりばったりストーリー！いきあたりばったりだから話がとんでもな方向に全力疾走しても許してね！？「この町で一番強い？んなわけねーだろ。勇者の血統？いや親父生きてるし…問答無用！？理不尽だー！ー！！」

## ↳プロローグ↳ 始まり(前書き)

あー…出来ればコメントよろしくお願いします  
生きる希望になったりしますんで！

## 〜プロローグ〜 始まり

「ハツハツハ！弱い、弱すぎるぞやられ役A！」

「…だれがやられ役だボケ…グフツ」

主人公の名はカイン

年齢18の少年で、何気に結構強い方の兵士だ

「主に」剣を使用する

ちなみにやられ役Aはやられ役A以外の何者でもない

「オイコラ」

失礼、読者はおそらく皆

「コイツはただの脇役か…」と思っただろうが、実はカインの友人  
だったりする

名前はアーシユ、やはり年齢18

コイツも剣を使用するがただの剣術ではなく、魔法剣と呼ばれるも  
のだ

「全く…少しは手加減しろよな」

「弱いのが悪い！」

「……………いや…確かにそうかもしれんが…」

「てか峰打ちだったろ？」

「拳に峰もクソもあるかよ！」

「そうだな、まあそんなことはどうでもいいが……」

「いいんだ!？」

「アーシユ、こんなものが」

カインはぶらぶらと何か一枚の書類を見せる

「ん？なんだ……!？」

「何やらかしたんかな、オレ」

「……………王様にお呼ばれなんて……何やらかしたんだ？カイン」

「……知らんが……何か不幸な気がする」

~~~~~王宮~~~~~

「おお、よく来たな」

「あの一……本日はどのようなご用件でしょうか？」

「いやなに、一つ頼みたいこと……いや、命令があったな  
心して聞け」

「は……はっ……!」

「カイン、貴殿に魔王の討伐を行ってほしい」

「はっ！……は？？」

〜プログラク〜 始まり(後書き)

…何も言ひませい

第1話 まだ旅立たない(前書き)

思ったままに気の向くままに







「多いわ！てかおいテメアーシユ！なんで燃やさねえ！？」

「あ！そうだった！じゃあ…」

「…Sword of corona…」

剣身が目に見えて灼熱を伴う紅へと変わる

「火剣！コロナア！！」

一振り、それだけで数多のパペットが燃え盛る

さらにパペットからパペットへ、火事のように火が移る

そして、辺りに人形の姿は見られなくなった…

「いつも思うけどその技自分は火傷しねーの？」

「いや、これで生じた炎なら少しだけ操れるからな」

「そうか、てか他の兵士やらはどこ行っただ？」

「…確かに」

「あ、火柱」

「おお、スゲー」

「ん？」

「あれ？」

「こつち来てね？」

「違うよ、目の錯覚だよ、火柱がでかくなってるだけだよ…きつと」

「……………」

「ぬおわ……………」

「あつぶねー、おい大丈夫かカイン!？」

「ぬお……………」

「追われてる!？」

「おお……………誰だこんなことするやつは……………いやそれ以前に町中でこんな出しているのか……………」

「初心者補正じゃね？」

「誰のことだ!?!つかそこは禁忌な気がする!つかこの火柱つぎつたい……………ちっ……………」

カインが加速する

そして振り向いて剣を構えようとすると

火柱も加速していた

「ウソん!?!？」

「おーい、遊ばれてんぞー」

「黙れ傍観者！！助けやがれ！お願いだから！！」

「いやムリムリ。そんなバカでかい火柱消せるわけないじゃん」

「一瞬動き止めるだけでいいから！！」

「わかったよ…んじゃ

I : S w o r d o f s u p r a s s h u t y p e - d r a  
g o n ! : : ! !

竜の形をした水が剣身を覆う

カインが火柱と共に向かってくる

「やれー！ー！ー！！」

「水竜剣斬！！」

振り下ろされた剣身から竜の形の水が火柱と衝突する

カインが構える

居合の構えを

数秒して水の水が砕け散る

「うっわ早っ！なんかショック！」

「十分だっ！！」

火柱がカインを襲う寸前、カインが鞘から剣を抜く

「無空閃!!」

空間を斬る

振るう剣が纏う真空の空間が火柱を断つ  
火柱は一瞬にして消えた

「ゼエ…ゼエ…全く…誰の…仕業だ…」

「あゝあ、もう魔力からっぽだよ」

「…フウ……よし」

…あー、王様んとこ戻るか」

「犯人はいいのか？」

「どうせ離脱してるだろ、全力でぶん殴りてえが」

「それもそうだな」

「つかこの町はいいのか？目茶苦茶ぶっこわれてるけど」

「そこはやっぱり初心者補…」

「いやいい、何も言つな」

第1話 まだ旅立たない(後書き)

自分は何がしたいんだろう…(汗)

く第2話く 旅立ち？いやまだだよ（前書き）

王様の口調変だな…。

ま、いつか



く第2話く 旅立ち? いやまだだよ

「で、行ってくれるんじゃない?」

「開口一番にそれですか…」

「まあ貴殿がなんと言おうとワシは行かせるがな」

「…えーと…なんですか?」

「そうしないとこの小説が成り立た…」

「行きます」

「おお、行ってくれるのか!」

「まあここにいるより面白そうですし」

「そうかそうか、じゃあ早速旅の仕度をしてまいれ。あと金は少しだけだが支給しよう。しかし今は不況ゆえに大した額は出せんがな」

「はっ!」

~~~~~

「で、だ。アーシュ」

「何だ?」

「ついて来い」

「は？……どこに？」

「どっか」

「これ以上ないアバウトな返答をありがとう」

「いやいや、マジ知らないんだって。テキトーに歩いてテキトーに情報集めるだけ」

「テキトーだな。その情報って何の情報だ？」

「魔王の居場所とか」

「……何故に？」

「魔王討伐のために」

「……」

「……」

「オマエ馬鹿だろ！？てか意味わかんねーし！オレらより強いやつなんていくらでもいんだろ！？なんでオマエなんだよ！？」

「オマ？」

「いやいや勝てるわけねー！」

「ぶっちゃけオレは魔王云々より冒険したいだけ。魔王の情報は二  
の次」

「……………なんか行くことはもう決定事項みたいだな」

「あたりまえじゃん」

「あたりまえってオイ…まあいいや。面白そうだし。じゃ、親に言  
ってくる」

基本的に二人とも楽観主義である

「わかった。ほんじゃ明日な」

「おう！！」

く第2話く 旅立ち? いやまだだよ (後書き)

なかなか旅立たないなー

〈第3話〉 最初の敵が強いという理不尽(前書き)

前回は疲れててかなり変になりました、すみません  
なのでもう一話どうぞ

〈補足〉

読者数が200突破です!

そして閲覧の回数が400突破です!!

ありがとうございます!

〈第3話〉 最初の敵が強いという理不尽

「父さん、魔王討伐しに行きたい」

「は？何言ってるんだカイン？」

「だから、魔王討伐するために旅に出たい」

「…もつと具体的に説明してくれ。意味不明だ」

「もつと具体的に説明中」

「あゝ、ほとんど分らんが大体分かった」

「（どつちだよ）」

「まあカイン、オマエも一人立ちしてもいい歳だしな。いいだろ、行ってこい」

「おお、了承してくれた。あんな理由なのに」

「親にとって子の自立は嬉しいことなんだよ」

「そーゆーもんか？」

「そーゆーもんだ」

「ここで“じゃあこの剣を持って行け”的な展開とかは？」

「あるわけないだろ」

「期待してなかったけどちょっと残念。

んじゃ明日出発するから」

「分かった」

~~~~~次の日~~~~~

町の門

その前に二つの人影

「んじゃ、行くかアーシユ」

「おー、てかどこ行くんだ？」

「知らんて」

「オイこら」

「いやだって地図もらおうとしたら“これを持って行け”って地球儀渡されたし」

「意味無っ!」

「まあ歩けばどっかに着くさ、絶対に」

「着く前に死なんかつたらな」

「非常事態にはアーシュって非常食がある」

「オイこら」

「冗談だ、とりあえず歩こつせ」

「わかったよ」

~~~~~

「カイン、迷ったな……いや迷ったは違うか。目的地なんか無いからな」

「威張るな、てかいつの間に樹海っぽいところに来たんだ？」

「歩いてたらだんだん木が見えて？さらにだんだん森になって？気づいたら樹海」

「ダルいな、でも歩いてたらいつか抜けるだろう」

「行き止まりが無い限りはね」

「……………」

二人の目の前には洞窟

中はそんなに暗くなさそうな洞窟  
そして先にアーシュが口を開いた



「……………地下帝国の入口？」

「オレには巢に見えるぞ」

すると洞窟の奥になにか赤い光

「……………！！アーシュー！避ける！」

轟音が響く

洞窟の入口いっぱいの大きさの火球が今二人がいた場所を通過する

「…………………………」

「グアアアアアアアア！！！」

その咆哮でカインが気づく

「 竜か！！！」

「オイオイ…いきなり大物とバトんのかよ」

「バカ！逃げるに決まってるだろ！あんなもん食らったら木っ端微塵だ！！！」

「お、おお… そうだな、逃げるしかないな」

「当たり前だ！行くぞ！」

「さすがに複数体は無理だもんな」



〜第3話〜 最初の敵が強いという理不尽（後書き）

うーん…展開どうしよう（殴

く第四話く 逃げろおー!!!(前書き)

…この調子だといつか絶対ネタ詰まるなと思わないわけじゃない  
けど当日の夜じゃないと調子出ないのさ!!!

〈第四話〉 逃げろおー!!

「なんでさ！なんでいきなり竜から逃亡しないかんのや!？」

「落ちてけカイン！口調が変だ！」

火球が風を切る

アーシユはそれを見て跳ぶ

「ぬおわー！ー！！危ねー！」

「見た感じ三体だな…」

そのとき二体がカインに向かって同時に火球を放つ

「ちっ!!」

片方の軌道から外れ、片方の軌道に乗る

「  
無空閃!!」

《何も纏わない》一閃が火球を断つ

「この際その技で突撃しねえ!？うおっ！」

「予備動作が長い！それに後一回が限度だ！よっ！」

「は!？なんで!？その技魔力要んの!？ぬあああ!！」

「炎圧で剣が折れる！うおわ！」

「あゝなるほど！　　！」

魔力を剣に込める

それを避けきれない火球に振り下ろす

「　　ぐっ！」

「アーシュ！！ああもうクソっ！」

よろけるアーシュに火球が迫る

その時軽い突風が吹く

「！ラッキーだ！」

カインが無空閃の構えを取る

ただ無空閃のときと違い、今回は風を読んでいる

「無空　　波あー！！」

真空の刃が火球を断ち、その向こうにいる一体の竜の片翼をも断つ  
片翼を失った竜は落下する

「グギヤアア！！」

パキン、と軽い音

「あゝあ、やっぱり《波》もダメだったか」

剣は柄だけになった

「でも二体だったらいけるんじゃない？」

「お、アーシユ生きてたか」

「おかげ様でね、てかさっさと逃げたいと思うわけですが  
あ  
り？」

「……………最悪だ」

空には四つの影  
それに四つの赤い球

「「うわわわわわわわわわわ！」「」

アーシユが叫ぶ

「いやムリムリ！四体ってシャレなんねーよ！マジで死ぬ！」

「うおっ！うわっ！ほっ！よっ！たあっ！ぬあああ！」「

「おお、避けてら。ってうわっ！」

「そっぴやここって樹海だったよな！？こんなに火球出しているのか！？うおっ！」「

「確かに！燃えてねえ！またこれも初心者補正か！？」

「だから何の話だ！うわっ！……て違うそうじゃない！ヤツらは火球

を放つても大丈夫なとこにしか放つてこない！」

「マジか！わっ！とと……………おおマジだ！サンキューカイン！」

竜は二人に一体ずつ襲い掛かる

「肉弾戦！？」

「よし！これなら…！アーシユ！一人でやれるか！？」

「見くびるなよー！てかオマエ武器ねーじゃん！」

「徒手空拳くらいできるさー！！」

竜のカギツメがカインに振り下ろされる

カインはその竜の人で言えば手首にあたる部分を掴み

背負い投げの要領で木にたたき付けた

「グギッ！！？」

「ヒュ、てうわっ！」

金属音

アーシユの剣と竜のカギツメが交差する

「うおっ！」

距離を取る



「120%マジでやるかな！」

Sword of thunder!

刀身が変わる

形を伴った雷いかずちへと

「うおおおお！」

竜に向かって駆け出す

カギヅメを雷の刃でいなし、腹の下に潜り込む

「雷神剣!!！」

竜の腹を穿った

「うしっ!てうわわっ!!！」

火球が舞う

「うおっ!?!」

「オイカイン!なんでだ!竜がまた増えて無敵ゾーンが消えたぞ!」

「?.....やべ」

「どうした!?!うわあ!」

「多分だが他の竜に周りの木を消された」

「あーそれで火事を気にせず放てると!ぬあー!」

「あ…………… 囲まれた」

「カイン、これってまずくね?」

「ぶじょじょ」

数多の竜が狙いを定める

「  
煌めけ  
」

それは第三者の声

「スターライト!!!!」

〜第四話〜 逃げろおー！！（後書き）

勢いで出します

要望があれば全力で応えるよ

〈第5話〉 流浪卒業かな（前書き）

何気に初の女性です

…不安のみでいっぱいです

〈第5話〉 流浪卒業かな

「「うおっ！？」」

突然視界が真っ白になる

それは竜の方も同じようでもりで騒いでいる

「《アーシユは目の前が真っ白になった》！！」

「元ネタじゃ真っ暗だな！」

「ところでよ、カイン」

「ん？」

「このチャンスにぜひとも逃げたい」

「でも視界が役に立たないから逃げれない？」

「その通り！…どうしよう？」

「こっちー！」

「「？」」

「二人とも早く！」

「「お、おう……」」

声がする方へ走る  
すると突然視界が回復した

「おお、《アーシユは目の前が鮮明になった》！」

「何がしたいんだオマエは……これは……何かの魔法か？」

「あ、来た！」

「お、君が助けしてくれたのか？ありがとうございます」

「命の恩人だな！」

「て言っても早くここから離れないと追われて喰われるけどね？」

「あゝ、この辺りに村かなんかないか？」

今のはカインの声

「え、今から行くつもりだけど。…あなた達、どこ行くつもりだったの？」

「どっかってのが一番正しい表現だと思う」

今のはアーシユ

「……………迷子？」

「いやいや目的地が無いから迷子とは呼ばない!」

「帰りが分からないのは迷子じゃないの?」

「帰ろうとしてないから?」

「じゃあ自分の現在地が分かってないのは?」

「それは……………カイン?」

「……………迷子だな」

「……………まあそれはいいとして、あんた達って流浪人?」

「合ってるようで違ってる気がするがやっぱり合ってるような気がする」

今のはカイン

「グギャアアアアア!」

「……………」

「来たあああ!」

「キヤーーツ!」

三人は走りだす

「ちょ!こつち!そつちは巢!」

「「え？……ぬあああああ！！」」

~~~~~

もうすぐ夕暮れ

たどり着いたのは一つの村

「つ、着いた……」

「よかった……生きてる」

「地獄を見てきた……」

上から、アーシュ、少女、カインである

「とにかく、宿屋に行かない？」

「賛成……ん？オマエってこの村に住んでるんじゃないの？」

「いや、私はもつと向こうの村から来たの。竜の討伐の依頼を請けて。約束じゃ一匹のハズだったんだけど……あれは何？異常発生？」

「なんだ……あの竜の群れはデフォルトかと思ってた。あれはたまたまだったんだな」

「そつみたいだな。あ、オレは壊れた剣の代わりを買ってくるから」



「あ、そう？、宿屋の名前は《白江の宿》よ」

「わかった。じゃーな」

「行ってらっさい。あ、おいカインー。ついでになんか短剣買っ  
といてくれー」

「了解ーっ」

~~~~~

店内

「この店で一番高い剣と短剣      あとその一番安い短剣を下さ  
い」

「あいよ」

カインは王様から貰った金にモノをいわせて店から出る

「まったく…なんでこんなモンが」

そう言っつて先程買った《一番安い短剣》をへし折る

「ギイツー！」

「ここでも何かありそうだな…」

大正解なカインである

「さて、宿屋の名前は『白江の宿屋』だっけ？」

~~~~~

「あ、カインさん」

「おおカイン、遅いぞー」

「ホレ、短剣だ。…ん？なんで君がこの部屋に？」

「いや、今後について話をしようと思って来てもらった」

「今後？」

「だってさ、オレら行き先ないじゃん？また迷ってエライ目に遭うのはゴメンだし、次の目的地はコイツがいたっていう国に行こうかと」

「成る程、名案だ。あ、それと君に聞きたいことが一つ」

「ん？何？てその前に私の名前はセウスよ」

「あ、うん、それを聞こうとした」

間が悪かった

「そういえば、オレらを助けたときの魔法。あれ何？」

「ああ、あれ？」

スターライトって魔法で、簡単に言えば太陽とか月とかの光を集束するの。

私にはあれが限界で魔力が尽きたけど。

頑張ればレーザーにしたり広範囲を焼き尽くしたりできるんじゃない？

ただ集束率とか範囲の二乗の割合で魔力使うから、そんなことができる人なんてそうそういないと思うよ」

「ふうん」

そうしてしばらく話した後

「じゃあ、そろそろ戻るね」

「おやすみなさ」

「また明日な」

そうして三人は眠り、やがて朝を迎える

〈第5話〉 流浪卒業かな（後書き）

ちゃんと魔王まで行けるんだろうか？これ

…不安だなー

〜第6話〜 また戦闘ですか？（前書き）

どうしよう...

コメディーっぽくない気がする...

どうしよう...

〈第6話〉 また戦闘ですか？

「…おお、目が覚めた」

早朝、珍しくアーシユの目が覚める

「珍しくって何だよ。いやまあその通りなんだが……ん？」

窓の外を見る

知らない人が戦っている

剣と

「…なんなんだ？」

とりあえず剣と短剣を持って外に出る

「とってもシユールな絵ですね、楽しいですか？」

「楽しいもんか！勝手にコイツが襲って来たんだ！」

男は懸命に《剣》を剣で叩き落としている

が、落ちた《剣》はまたすぐに男に飛び掛かる

「あー！もう、しつこいー！」

「えーっと…本気で困ってるみたいなんで……………ほっ」

アーシユはその《剣》の柄の部分を掴み

「せいっ」

地面に突き刺して

「ふんぬっ」

全体重を乗せてへし折る

「ふん！どうだ！？」

「おお、ありがとうございます！」

「いいっていいって。…ん？あれは？」

アーシユの視界に影が映る

「…！！カイン！カーイーン！」

そう言っつて宿屋に駆け込む

~~~~~

「…なんだコレは」

場所は村を出たすぐの平原

「魔物の群れ以外に見えるか？」

「あ、いたいた。おーい！…て何コレ？」

「ん、セウス？何でオマエまでここにいんだ？」

「あんだだけでかい声出せば誰でも起きるって。ってそんなことより、何コレ？」

「ん？魔物の群れ」

「まあ、そうだろうとは分かってたけども。全く、この村の修道士は何をやってるのよ」

「ん？修道士？それってあの結界を張ってるってやつ？」

カインが聞く

「うん。あんた達の国にもいたんでしょ？」

「いたというか…信じてなかったというか…」

「？まあいいわ。とりあえずアレを根絶やしにしてみる」

「できるのか？」

「未遂とはいえ、竜に挑もうとしてたのよ？それにスターライトだつて上級の魔法だし」



ここに一体倒した人と

羽を断つて一体を行動不能に、徒手で一体を気絶させた人が一人ずつ

「…まあいいや、それじゃお手並み拝見といこうか」

「何で偉そうに？まあやるけどっ！」

そう言っつて目を閉じる

「『我、ここにあらん。私の眼前に現れ給うは灼熱を伴いし紅きモノ』」

目の前の空間が紅く光り、それはだんだんと一点に集中して球形を成していく

「『破壊せよ。焼き尽くせ。』」

…Expplode!!…

ルートは…『』」

やがて完全に球の形に成つたソレは周りを照らすことも無く、視覚的に迫力は無い。

そしてセウスは目を開け

「轟け！！エクспロード！！！」

紅い球は綺麗な放物線の軌跡を描きながら群れの中心らしき場所へと向かい

閃光。続いて爆音。チュドーン。魔物は一瞬で消える

はずだった。しかし、影は一つ残っている

「「「!?」「」」

「何よあれ!?!」

「…騎士…?…か?」

「《アーシュは目の前が真》ゲフツ!! すまんカイン! オレが悪かった!」

その影はこちらに向かって走り出す

〜第6話〜 また戦闘ですか？（後書き）

真面目と書いてシリアスにはならんぞー!!

…もっとはっちゃけたいな。

〈第7話〉 迫るナイト（前書き）

昨日はなんと執筆する前（0時前）に爆睡してしまってます…  
すみません

〈第7話〉 迫るナイト

「…うわ速っ！でかつ！」

アーシュが叫ぶ

その騎士は3、4メートルの巨軀でもものすごい速さで向かって来る

「ウゝオオオオオオ！」

「ぐっ！！！」

金属音が響く

カインの剣と騎士の剣がぶつかり合う

「こ、これはまさか《黒騎士》！？いや、でも色はほとんど濃くない？」

セウスが言う

黒騎士とは色が濃い方が強いと言われている魔物であり、漆黒の黒騎士だとそれはもう強いとかなんとか

「おいアーシュ！…見てねえで…戦えっ！！！」

黒騎士とカインの背の差は歴然

したがって黒騎士の剣は振り下ろし、カインの剣は振り上げる形となる

当然、黒騎士が圧倒的に有利だ

「オマエら剣速すげえんだよ、全く…  
…Sword of Suprasshu…」

剣が青く光る

「斬水弾！」

水の塊が黒騎士の足を狙う

しかしその攻撃は目標にはあたらない

そしてアーシュの視界から黒騎士が消えた

「!?!どこ行つた!?!」

「アーシュ!!上だつ!!」

見上げる

「ウゝオオアアア!!」

一つの影

しかしアーシュは跳んだ

はたから見れば自殺行為

だがそこに魔法で放たれた特大の水弾

「ウゝオオアアア!!」

黒騎士はそれを空中で切り裂く  
だが黒騎士の眼前にはアーシュが

「うらあっ!!!」

渾身の蹴りを見舞う

黒騎士はバランスを崩したまま落下する

「カイン!!!」

「わかってる!」

カインが構える

「無空閃!!!」

ガキンツと鈍い音と共に黒騎士の体が上下に綺麗に真っ二つになる

「ウゝアアアア!!!」

崩れ落ちる黒騎士

「よっしゃあ!」

「…危なかった…」

「か、勝てたの?」

上からアーシユ、カイン、セウスである

「あ、そうだ。セウス、あれマジで感謝だ。あれが無かったら死んでたかもしれないし」

「ああ、あの水弾？別に狙ったわけじゃないよ？あんたの技だつて当たると思ってたし。カインさんが一撃で仕留める技持つてるなんて知らなかったし」

「運で勝つたつて感じだな」

カインの言うとおりで、今回はたまたま勝つたというほうが正しいのだ

「というか黒騎士つてAAランク級じゃ…まあ色からしてAランクだったかもだけど」

「え？あいつつてそんな強かったの？」

「ちなみに竜つてランクは何なんだ？」

カインが聞く

「知らないの！？…个体によって様々だけど私が請けたのはAランク級だったよ」

「へ」

「…ん？…セウスつてAランクだったのか！？」



カインが驚いて聞く

「え？そうだけど…言ってなかったっけ？」

「今までランクの話なんてしたこと無かったよ…作者あ！」

すみません

中々入れるタイミングが無くて…

「お、おいカイン。最後のは…」

「気にするな」

「そ、そうか…」

「ねえ、そろそろ移動しない？」

「じゃ、村に…」

アーシュは来た道に戻ろうとする

「へ？何しに？」

「え？いや…なんだろう」

「バカめ」

「ええ〜…」

「私はこのまま国に行こうと思うんだけど…」

「あ、そう？そうだね、うん。戻る意味なんてなかったね、私が馬鹿でござんした」

〈第7話〉 迫るナイト（後書き）

ランクについて

E、D、C、B、A、AA、Sの順でSが一番強いです

ちなみにランクを上げるには昇格試験が必要だったり

〈独り言〉

この小説：見てくれてるのかな？

〜第8話〜 変な展開（前書き）

…最近眠いッス…

〜第8話〜 変な展開

〜リレリア国〜

「ってどこだ？」

「いやいや、私が住んでる国だよ」

ちよつとした説明をして

「…なんもすることねえな」

アーシュが呟く

「…何しにここ来たんだろっ」

カインがものすごく深刻そうな顔になっている

「？あんた達つて旅人でしょ？つまり色々な場所を楽しみながら渡つて行くんじゃないの？」

「いや、オレはそんなことはしないハズだが…」

まだ深刻そうだ

「え？じゃあ何か目的でもあったの？全く無さそうだけど」

「目的？目的…うーん…目的……………！！！！」

カインはやっと思い出した

「え？何？」

「魔王討伐！！」

「あ、そうだったな」

「……………は？」

「全くもって忘れてたな、てことでセウス、魔王についての情報を得られる場所って知ってるか？」

「へ？は？魔王？どーゆーことなの？」

困惑しっぱなしだ

「オレらは勇者だ」

「いやいや、オレは違っつて！カインが勇者！」

「え？そうなの？…私より弱そうなの？勇者？」

「とてつもなく心外だな」

「実はランクSだったとか？」

「「いや、C」」

「…アホなの？」

「おう直球！！」

「いや、ただ単に面倒だったただけだ」

「いやでもこつて…」

「でも実はオレだって竜一体倒してるし、カインなんか一体を移動不能にして一体を徒手で戦闘不能にしたんだぜ？」

「！？それホント！？」

「うわめっちゃ食いついた」

アーシュが少しビビる

「へへあんた達ってそんなに強いんだ。うん、だったら勇者っていうのも信じる。じゃあ魔王についての情報が得られると思う場所に案内するよ」

「頼む」

「へへ竜ってそんなに強かったんだなー…いやまあ死にかけたけども」

~~~~~

「じじって…」

アーシュが呆然としている

「王宮…だよな。酒場じゃないんだな」

カインもビックリの展開

「あ、私、いわゆる王女なのよ」

作者もビックリの展開

「え…ええええええ!!?」



〜第8話〜 変な展開（後書き）

一週間くらい止まるかも

〜第9話〜 ものすごく変だな（前書き）

ケータイなくしてマジ泣きぞー

すいません

〜第9話〜 ものすごく変だな

アーシュが問う

「えー、そのお姫様がなんで竜退ぶふおっ…ガクッ」

吹っ飛んだ

「王様の御前ですよ？」

姫 セウスが口元をひくつかせている

「うおっほん…で、本題に入ってもいいのか？」

「あ、はい。魔王の情報ですけど…」

「その前にカインさん？なんで目をつむっているの？」

「……………」

カインは目をつむっている

まるでそこにある事実を拒絶しているかのようだ

「……………」

「……………」

そこに王が

「…本題に入ってもいいか？」

「「ハイ…どうぞ…」」

「ワシも知らん」

「は？」

カインの目が一瞬開く

……………一瞬だけ

「だからワシも知らんのだよ、てか知ってたら総攻撃しとる」

ごもつとも

「…ということとは…」

「そうだ、テキストに探すしかない」

現在、8話にして情報無し

「終わるんだろうか…この旅…」

どうだろう…焦ってる

「終わるといいな…そもそも…魔王なんているんでしょうか？」

「ああ、それは間違いない。あの魔王はな、昔にも存在しとった。今まで封印されとったんだが最近封印が解かれたんじゃ」

「え！？いやそれ大事！大事な情報ですよ！！封印してあった場所は！？昔その魔王が拠点にしていた場所は！？」

また一瞬目が開く

「そう焦るな…しかし封印してあった場所の辺りは既に調査して監視してある。それとその魔王は拠点を置かなかったそうじゃ」

「そうですか…その他には何か？」

「いや、これだけじゃ」

「わかりました。ありがとうございます」

そう言って脇で泡を吹き続けているアーシユの襟首を掴んで引きずって行く

目を閉じたまま

「カインさんって意外と失礼？」

奥でセウスがそんなことを呟く

~~~~~

城から出て適当に歩く一行

「セウスがお姫様だったとはな、あれじゃ旅の連れには無理か。

…それで、これからどうするんだ？」

「しらみ潰しに探すしかないだろうな」

「え、締まんねーな、…ん？」

アーシュが何かに目をとめる

そこにあつたのは国から国民に通知するための看板

「何かオレの名前が…あ？」

【アーシュ殿へ】

【】

【今すぐ自国へ帰るように】

【仕事が入った】

「あ…これはどんなパターンだ？」

「時々口調がかぶるからじゃねーのか？」

「…！そんなハズはっ…！…そんなバカなっ…！」

「本格的にヒロイン出したいんじゃないの？」

「もう手遅れだろ。考えてなさすぎなんだよ」

「…！そんなハズはっ…！？」

「大体ヒロイン出すにしても、どんなヤツか具体的に決めてないん

だろ」

そ、そんなバカなっ！！

「凶星かよ…名前はおろか、大まかな性格も曖昧なんだろ」

「つかやっぱオレら口調かぶってんな。見分けてないんじゃないかね  
えか？」

「そ、そんなバカなあっ！！！！」

〈第9話〉 ものすごく変だな（後書き）

まあどうかで出てくるでしょうがね

アーシュ「こんな風になー!」

そう、こんな風にか



く第10話く 次の相手は土とかの塊（前書き）

短いな

〜第10話〜 次の相手は土とかの塊

「で、アーシユもマジで行っちまった…ホントに展開無茶苦茶だな  
オイ」

すみません

「…一人だとアレだな、旅って感じじゃないな。まあいいや」

そう言っつて酒場に向かう

~~~~~

「おいおっちゃん、手配書あるか？」

「おうあるぞ、どのランクがいい？」

「んじゃBあたりで」

「お！おまえさん中々強いのか。ん〜…お、いいのがあるぞ」

「どんなのだ？」

「他のヤツのパーティー希望があつてな、希望内容は『一人でも勝  
てる人』だつてよ。ちなみに敵はゴーレムだ」

「ゴーレムか…てかその希望内容って結構キツくね？」

「でも一人で行くつもりだったんだろう？いいじゃないか、賑やかなほうが」

「まあ…それもそうだな。じゃ、そいつはどこにいるんだ？」

「そこにいるお嬢さんだ」

そう言っつてカインの後ろを指差す

「ん？お嬢さん？」

カインが振り向く

視界の中にいる女性は一人

「あの…ゴーレムの人？」

「へ？ゴーレムの人？それってゴーレムですか？人ですか？」

「いや、そういう意味じゃなくて……ゴーレムに希望条件出してた人ですか？」

「え、そうですけど……あ、請けてくれる人ですか？」

「そう、それで準備できてるならすぐに出発したいんだけど」

「いいですよ。じゃあ早速、金儲けじゃなくですな危険なゴーレムを倒しに行きましょうか！、ハイ！」

「…金儲け？なんかいきなり性格がわかるな…」とここで名前は  
「？」

「ミラーナです。あなたは？」

「カイン。じゃあ行くつか」

「はい」

く国を出てく

「…とじるぞ、そのゴーストってどこにいるんだっけ？」

「えー!？」

情報の準備ができてなかったカインだった

〔第10話〕 次の相手は土とかの塊（後書き）

〔補足〕

魔物編

「ゴーレム」

魔法使いだとか魔法を研究したりする人が地面に魔法をかけて形と動きを備えたもの

魔物というよりは兵器の方が近い

落とした魔法瓶が原因で出来たりすることもしばしば

動きは大体パターン化しているが、プログラムが複雑（凄い魔法使いによる）なほど人間に近い動きをする

話させることも理論的には可能だが目茶苦茶面倒だとか

∴ 後書きの有効活用？

〜第11話〜 ゴーレム戦（前書き）

展開のパターン化に戸惑う

〜第11話〜 ゴーレム戦

「んで、廃墟に来たわけだが」

廃墟です

経緯？ここは廃墟です

「で…どこにいるんだ？」

「歩いてたら会いますよ、多分」

「展開ものすごく速いからな」

「そうですね、どこから現れてもおかしくないです」

「……………なんかものすごく危険な気がする」

突然

カインの足元が暗くなる

「うおー！！」

反射で跳ぶ

ドズンッ！！！！

カインがいたところには小さなクレーターができていた

そこに立つおおよそ6メートルの影

「でたな…ゴーレム！」

「え！？このゴーレム大きい！！！」

「ん？そうなのか？」

「普通は3メートルから4メートルです！…て知らないんですか！」

「おう知らん！ そっち行つたぞ！」

ミラーナに殴り掛かる

それを十分に引き付けて横っ跳びで躲す

「ふっ！」

「おお、やるなー」

瞬間 ゴーレムの右手が開かれ、ミラーナに向ける

その手の平には魔法陣が

「 …！！」

放たれた火炎弾

咄嗟に両手をかざす

その両手から透明な壁らしきものが発生し、ミラーナをそれから守る

「（魔法を使った！？やっぱりこのゴーレムは普通じゃない…）」



「おい！また来るぞ！」

一気に間合いを詰めてくる

ミラーナはまだ存在するその壁を

「はあっ！！」

飛ばした

「！？」

6メートルの巨体が吹き飛ぶ

しかし、ゴーレムは空中で体制を戻し着地と同時にカインに迫る

「当たるか！！！」

その拳を紙一重で避けて懐に入る

「フンッ！」

斬りつけた

「…かてえ！」

が、斬れるわけもなく止まったその刃を左手でわしづかみにされ

バギィ！！

折られた

「あー！ヒデエ！」

「ヒデエじゃないでしょー！」

いつの間にかミラーナが来ていた

そして例の壁でゴーレムを吹き飛ばす

「それ便利だな羨ましいぞオイ」

「その前に武器無いけど大丈夫？」

「大丈夫じゃない。徒手は痛いし攻撃手段があれしかない」

「あれって何？」

「初期魔法」

「ダメじゃないですか！」

「何おう！魔法力はそれなりにあるんだぞー！」

「いやいや！そんなに簡単じゃないでしょう！？ちゃんと生きて帰れるんですか！？」

「モチのロンだ！ー！」

「どこからそんな自信が……あ！来ましたよ！」

ゴーレムが走ってくる

「うわっ！足速っ！」

跳躍

カインを約50メートル先から踏み潰しにかかる

「すごっ！当たらないけど！」

そう言っって背後から掌底を当てる

「うおああああ！！？？」

「え？え！？」

6メートルの巨体が吹っ飛ぶ  
しかしそれ以上にカインが吹っ飛ぶ

「いっつ……あーミスった。かなり久々だったからな」

「今の何ですか！？」

「威力を上げた。けど反作用でオレのが吹っ飛んだ」

「確かそついう魔法って莫大な魔力が必要なハズじゃ……」

「だからそれなりにあるんだって。てかアイツ動かねえな。やったか？」

ゴーレムはうつぶせたまま動かない

しかし、突然起き上がり火炎弾を放つ

「!！」

ミラーナが《壁》を創りそれを弾く  
そのまま飛ばそうとするが、ゴーレムは火炎を連射してくる

「くっっ!！」

「おいミラーナ!二秒くらいヤツの動きを止める!！」

カインがゴーレムに突撃していく

「わ、わかった。やってみる」

〜第11話〜 ゴーレム戦（後書き）

徹夜って辛いですね

〜第12話〜 ゴーレム戦その1〜 (前書き)

……誤字脱字とかあったりするのかな？

〜第12話〜 ゴーレム戦その後

火炎を躲す

拳を躲す

懐に入る

「ちっ」

が懐に入るとすぐにバックステップで距離を取られる

「なんでバックステップであんなに跳べるかなあ？反則だー」

火炎が舞う

「おっよっほっはっ……………なんかこれ避けるのも慣れてきた」

「慣れた！？こんな段幕に慣れたんですか！？」

ミラーナは《壁》を幾重にも重ねてこれを防いでいる

「あ、そうだミラーナ！オマエ水の魔法は使えるか！？」

「得意です！」

「うーん……………じゃ、アイツを倒したらずぐに水柱の詠唱に入れ！」

「え？あ、わかりました！」

そのままカインはゴーレムに再度火炎を躲しながら突っ込む

「H A H A H A！当ててみる！」

「……凄……。あ、火炎が止んだ」

すぐに肉弾戦に移る

ゴーレムが拳を振り下ろす

カインはその軌道を見極め、引き付けて躲そうとする

突然拳の動きが止まる

「？           ！（フェイント           ！？）」

気づいたときにはもう遅く、巨大な左拳が頭部に迫る

しかしその拳はカインの頭部に当たる前にカインから遠ざかる

「           ミラーナか！」

ミラーナが小さな《壁》を飛ばして拳を押し返していた

ゴーレムがバランスを崩し、仰向けに倒れる

「！ミラーナ！詠唱！」

そう叫んで胸部を狙って跳ぶ

「ラダー・キークーック！！！」





「ほぼほぼほぼ……！」

地面に到着するころには落下速度はほぼ0になっていた

「……………疲れた、特に最後の水。永遠に感じた。」

「…カインさんが指示したんですよ、でもやっと倒せましたね」

「そうだな、かなりヒヤヒヤしたけど」

「アハハ…そうですね。それじゃああの頭持って戻りましょうか」

「ん？ああ、先帰ってていいよ、まだ足動かないから」

よく見ると足の部分部分から血が滲んでいる

傍目からは分かりづらいが、重度の内出血などかなり酷い状態だったりする

「あんな蹴りでしたもんね……………治せますよ？」

「……………え？ああ、そうなの？じゃあ全力で早く頼む、地味に痛い」

「わかりましたー」

〈第12話〉 ゴーレム戦その下 (後書き)

アーシュ「なんかいつも思うけど内容に関して説明不要だよな」

ごもつともですな

第一どこに向かっているのか分からないですし

アーシュ「せめて設定くらい決めとけてんだ」

この辺りは完全に反省してます

アーシュ「モチロン後悔は？」

ないっ!!

アーシュ「(言い切った…) まあなんかこんな感じだけど次回も読んでくれるといいな」

なっ!

アーシュ「(…キャラ変わった?)」

〈第13話〉 黒い塔（前書き）

再開。

今更ながら振り返ると無茶苦茶に思えてきた（焦

あ、そういっ感じでした）

〈第13話〉 黒い塔

「でもカインさん」

「ん？なんだ？」

「魔力凄いですよね」

「そこそこはあるって言ったろ」

「いや！いやいや！一流の魔術師でも魔法使いでもあそこまで強化できるほど魔力ないですよ！」

「そうなのか？」

「知らなかったんですか！？」

「冗談だよ、そのくらい知ってる……………ん？」

「どうしました？」

「いや、なんか黒い線が足元を通過したような……………」

「！！カインさん！！あれ！！」

「ビックリマーク多いな……………お？あんなとこに塔なんてあったっけ？」

「あんなどす黒い塔を見逃すわけが……え？じゃあ今出てきたの？」

「この場合は《出現》？いや《発現》？はたまた《発生》？…いや流石に発生はないか」

「発現も無いんじゃないですか？こんな物を発現できる者なんていないでしょう」

「魔王だとか」

「こんな力を持っていたらいくつかの国はとっくに消し炭ですよ」

「だよな〜……ミラーナ」

「？なんですか？」

「壊したら全部解決しないか？」

「壊せと？」

「根本をばっさりと、全力で」

「……………ハア……………」

「頑張れ〜」

「全然他人事じゃないんですけど…というかいいのかな…？」

詠唱を開始する

「《我ミラーナの名の下に聖霊テティスを喚ばん》」

ミラーナの周りに光と共に新たな気配が発現される

「《顕現、収束せよ、それは全ての源、青き武器》」

さらにどこからか水が発現され、それは次第にミラーナの目の前で小さな雫になっていく

「《侵せ、喰らえ、刳れ、穿て。今、その所有者を我に与えん》」

雫はやがて肉眼で捉えられない程に圧縮され

「《型0・解放》」

塔のある方向に圧縮が解かれる

その極太レーザーに触れた木々は、まるで始めから無かったかのようにつ触れた部分が穿たれ、支えが無くなった上部は重力に引かれてレーザーに喰われる

「うわ、すげっ！」

しかし、塔がある場所でそのレーザーは途絶えている

跡に残ったのは塔がはつきり見える道

「ハア…ハア…え！！？？うそっ！！？？」

「…………マジかよ」

「き、傷一つ付いてない!？」

「…魔法で破壊するのは無理だな」

「どうしましよっ…」

「突入？」

「しませんよ!もう魔力ないですし、もう夕方ですよ!」

「だよな。じゃ、やっぱり一旦戻ろっか」

「はい」

「てかミラーナ強っ」

「なんですかいきなり?」



く第13話く 黒い塔（後書き）

型0は『タイプゼロ』で読んでね

しかし……………ちゃんと考えておくべきだったな

〈第14話〉 何も無い(前書き)

投稿が恥ずかしいとか思ったたら負けですよね。

よじやく前を向けそうです

〈第14話〉 何も無い

「…そういえば」

「ん？どうした？」

「あんな塔が現れたんだから、国も黙ってないんじゃないですか？」

「ああ、さっき一個小隊出てった」

「え！？…気付きませんでした…」

「精鋭つぼかった」

「へー…あ、それともう一つ」

「？」

「明日も行くんですか？」

「行かない？いや動機なんてないけど」

「行きますけど…アレ気になりますし」

「だよなー」

「二人でなんとかかなりますかね？」

「ピッピ人形よろしくアーシュがいたら気が楽なんだが…」

「アーシュ…さん？って誰ですか？」

「知らんでいい、ってかアイツを説明するのはめんどい。あ、魔法剣士だったな」

「魔法剣士？なんでそんな効率悪そうな…」

「カツコイイから、だとよ。実際は魔法を纏わすのが得意だったから？」

「ちゃんとした理由あるじゃないですか」

「ちゃんとした…ねえ」

「？」

「いや、別に何も無い何も無い。あ、そういえば宿どつするっ？」

「いえ、もちろん適当に二部屋借りますよ。今回の報酬で……………」

「……………？」

「あーっ！っ！…！」

「うおっ！？どした！？」

「証拠の制御体、忘れてきました！…！」

ゴーレムにはその身体を統制する部分がある。

それを調べればどんなゴーレムなのか大体分かるため、倒した証拠としての信頼性が高い

「…オレ、金ならあるよ」

王様から頂いたお金が吐き捨てるほど

「スイマセン……………」

「許す」

「あ、あう……………あ、ありがとうございます…………？」

なんか困らせたようです

「プッ」

当たり前だけど確信犯

く第14話く 何も無い(後書き)

短いなあ…

続けたいなあ…

〈第15話〉 相手が硬いほど痛い(前書き)

ルビって難しいなー

〈第15話〉 相手が硬いほど痛い

〈次の日の朝〉

「じゃあ行くか」

「ハイ」

そう言っつて宿を出る

「ん？」

視線の先にはいつかのお姫様（？）

「あ！カイン！？」

何故に呼び捨て？しかしそこは気にするところではない

「なんでこんなところにいるんだ？セウス」

「あんな大きい黒い塔が突然出たのよ？ビックリしたの」

微妙に会話になってない気がする。のでもう一度質問

「いや、だからどうしてあの塔に行こうとしてそうなんだ？」

「だから…ビックリするものが出てきたから」



ああ、成る程

「好奇心？強すぎる好奇心は猫を殺すらしいぞ？」

「大丈夫よ、多分」

サラっと言うが、この人物は一国のお姫様である

そんな人がこんなに簡単に外出できるのだろうか？それも得体のしれない物体の所へ

「セウス、仮にもお姫様なのに……」

「仮にもって何よ！？……ってあれ？そっちの人は？」

完全に入る隙が無かったミラーナにやっと気付く

「あ、ハイ。ミラーナと言います」

「親切にどうも、アタシはセウスよ」

ふと疑問に思う

「あれ？セウスの一人称ってアタシ、だったか？」

「他人行儀なときは私、かな？気にしたこと無いけど」

「あ、あの、セウスさん？」

「ん？何？」

「セウスさんもあの塔に向かっているんですね？だったら一緒に行きませんか？」

「もちろん、というかそのつもりだったけど」

「まあセウス強いしな、心強い」

命の恩人だし、とりあえず

「んじゃ早く行こうか」

と言って三人は歩き出す

（数十分後）

「これか」

目の前にはあの塔。近くで見るとバカみたいにデカイのがよく分かる。

真っ黒で所々穴が空いている。流石に窓は無かった

「不気味ですね…」

「普通に怖いわ…」

カインが歩き出す  
が、すぐに額に衝撃

「ぶっ！！！！」

頭がぐらぐらする

コンクリートにぶつけたときと同じ

いやそれ以上の激痛と不快感

「だ、大丈夫ですかカインさん？」

「いったく〜く！！……結界かよ！」

昨日のレーザーもこれに遮られたのだろう

よく見れば周りで兵がどうにか破ろうと色々している

「この結界…アタシじゃ無理っぽいね」

「私も……ダメそうです」

「あゝあ、折角来たのに。結局これなのかよ」

そう言っつて結界に体をもたれる

刹那、目が眩むほどの閃光が煌めき耳をつんざくような爆音が轟く

「うおっ！……うわっ！？」

すぐにそれらは止み、少しずつ視覚と聴力が回復してくる

そしてセウスとミラーナの視覚には

「……………ウソ!？」

完全に尻餅をついて打ったのだろう腰をさすっているカインがいた

境界の内側で

〈第15話〉 相手が硬いほど痛い（後書き）

最近生活習慣が…（汗）

夜眠れません、朝起きれません  
私の一日から朝が消えました

昼に始まり、朝になる前に終わってしまうのです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8989g/>

---

とんでも勇者御一行様

2010年11月23日17時10分発行